1　新しいラジオ番組

十二歳のダマシエン

ダマシエンは、アフリカ大陸の中央にあるルワンダという国に住んでいる男の子です。十二歳ですが、まだ学校に行ったことはありません。

目が見えないので、小学校に通うのはむりだとまわりの大人に言われたからです。

「じゃ、お母さん、行ってきます！」

朝の涼しい風を頬に感じながら、ダマシエンは今日もお友達と一緒に水くみにでかけます。

家族みんなで使う水がたっぷり入るプラスチックの容器を両手に、みんなでおしゃべりをしながら何キロも歩きます。いろいろな鳥のさえずりが木々の間から聞こえます。

「おい、知ってるか。ラジオで面白い番組が始まったんだよ」

友達がダマシエンに教えてくれました。ダマシエンがラジオを聞くのが大好きだと知っているからです。

「『イテテロ』っていう番組で、楽しい歌とかずる賢いウサギとか出てくるんだ。もうすぐ始まるからみんなで聞こう」

ちょうど水くみ場に着いたころ、『イテテロ』の始まりの音楽が流れ始めました。みんなで一つのラジオのまわりに集まって耳を澄ませます。子どもの声で番組が始まりました。

「みなさん、こんにちは。もうすぐ学校の始業式ですね。今日のテーマは『学校に行こう』です。おやおや、イテテロの森の動物たちが学校について話しているよ。聞いてみましょう」

ラジオから、小鳥のアカニョニがいつもの広場でお友達に話しかける声がします。

「ねぇ、今朝私はどこにいたと思う？　小学校に行って、窓から教室の中をのぞいてきたの。春休みが終わって、学校は子どもたちでいっぱいなのよ」

子牛のアカニャナが答えます。

「学校ってどんなところ？　みんな何をしているの？」

学校に行ったことがないダマシエンは、この会話にひきこまれました。

学校ってどんなところ？

「三年生の教室ではね、ＡＢＣの歌を歌ったの」

そういって小鳥はＡＢＣの歌を上手に歌ってみせます。

ダマシエンは考えました。歌なら僕、得意だな。僕も学校に行ってＡＢＣの歌を歌いたいな。

目が見えないと小学校に行くのはむりだと聞いていたのですが、どうやら目が見えなくてもできることはありそうです。

その晩、ダマシエンは家に帰ってからお母さんに頼みました。

「僕、学校に行きたいんだ。ラジオでやってたんだけどね、学校では歌を歌ったりするんだって。僕は歌うのも踊るのも得意だよ。数だって数えられるし。僕、学校へ行って、みんなと一緒に勉強したい」

お母さんはびっくりしました。ダマシエンがほかの子たちのように学校に行けるって本当かしら。本当ならいいのだけれどと、嬉しさと不安がまざったような気持ちで、とにかく学校に行ってみることにしました。

そして熱心な先生にも助けられ、ぶじに入学することが決まったのです。

十二歳で一年生の勉強を始めるのはちょっと珍しいかもしれません。でもルワンダの小学校にはおうちの都合で入学が遅くなる子どももいますから、同じ学年にいろんな年齢の子どもがいるのは先生も慣れっこです。

学校が始まるとダマシエンは子どもの権利について学びました。そして、はりきって歌を作りました。

「子どもには学ぶ権利があるんだって。学校は楽しいよ〜」

歌っていると足取りも軽くなります。頭の上のお日さまが輝いているのが肌に感じられます。

「イテテロ」って何？

「イテテロ」はルワンダ語で「子どもをはぐくむ場」という意味です。

子ども向けのラジオ番組『イテテロ』は、ダマシエンやほかのたくさんの人たちの人生を変えました。

この本は、ルワンダで初めての子どものためのラジオ番組『イテテロ』ができるまでのお話です。